美術科教育学会通信 №47

２００２年１２月７日発行

事務／通信　〒184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１
東京学芸大学 美術学科 美術科教育学研究室内　柴田和豊宛
Ｔｅｌ．/０４２（３２９）７６０８　Ｆａｘ．/０４２（３２９）７５９９（柴田直通）
Ｔｅｌ．/Ｆａｘ．０４２（３２９）７５９４（相田直通）
Ｅ－Ｍａｉｌ．/kshibata@u-gakugei.ac.jp（柴田）/aidaman@u-gakugei.ac.jp（相田）

「第 25 回美術科教育学会横浜大会プレ・シンポジウム」開催のお知らせ

新井哲夫（群馬大学）

第25回美術科教育学会横浜大会に先立ち、美術教育の課題と授業研究部会の企画により、下記の要領でプレ・シンポジウムを開催いたします。多くの方のご参加をお待ちしております。

＜シンポジウム・テーマ＞
危機に立つ美術教育－小・中学校における美術教育の現状と課題、そして美術科教育学会の果たすべき役割－

＜シンポジウムの目的とテーマ設定の背景＞
本シンポジウムは、「危機に立つ美術教育－小・中学校の美術教育の現状と課題、そして美術科教育学会の果たすべき役割－」をテーマに、今日本の美術教育が置かれている危機的状況を直視すること、それを通して問題の所在を明らかにすること、そして、願わくば、危機的状況を打開 する手掛かりを見出すことを目的として開催します。

テーマ設定に至った背景は以下のようです。平成 14 年(2002)4 月から学校完全週 5 日制が全面実施されましたが、それに伴って授業時数の削減が行われ、図工・美術の年間授業時数も大きく減少しました。授業時数削減に伴う影響は以前から予測されていたことですが、それが現実のものとなり８ヶ月余りを経た今、教育現場の美術教育が直面する危機的状況は、予想を遥に超えたものになっています。

例えば、中学校では、１人の美術教師が受け持つ総授業時数（持ち時間）は以前と変わらずとも、1クラス当たりの授業時数が減少したことによって指導する生徒数が激増し、1週間に 700 人を超える生徒を受け持つという例も決して珍しいことではありません。もちろん授業時数の削減による影響は、生徒にとっても深刻です。活動が細切れになり、じっくりと心を集中させて取り組むゆとりがないなど、創造的な活動を主眼とする美術の学習活動にはどう考えても不適切な条件を強いられています。このような条件の下で、第15期中教審の第一次答申で述べられているような「［ゆとり］をもった授業の中での、個に応じた指導の充実」が可能かどうか火を見るよりも明らかです。

一方、小学校図画工作は、多くの場合学級担任が指導することもあって、授業のやりくりは比較的容易です。したがって、授業時数削減による直接的な影響は中学校ほど深刻ではないかもしれません。しかし、授業時数以前の問題に一層大きな困難が潜在しています。従来から常々指摘されてきたことですが、図画工作の指導に自信を持てず、戸惑いを感じている全科担当の教員が少なくないということです。これまでの小学校教員養成課程のあ

り方に主要な原因があることは間違いありませんが、問題を一層深刻にしているのは、平成10年の教育職員免許法改正により、小学校教員免許取得に必要な「教科に関する科目」（小学校教科専門科目）の履修単位数が激減したことです。小学校教員の一種免許状取得に必要な「教科に関する科目」の最低単位数は以前は9科目18単位でしたが、平成10年の改正により4科目8単位となりました。つまり、生活科を含む９科目の中から４科目だけ選択履修すればよいことになり、今後、小・中学校で図画工作や美術を学んで以来全く美術教育を受けずに小学校教員となり、図画工作を指導する教員が少なからず現れるということです。このことは、今でさえ図画工作の指導に戸惑いを感じている教員が少なくないという状況を、一層深刻化させることになるでしょう。

　このような例を挙げただけでも、今後なし崩し的に小・中学校における美術教育の空洞化や形骸化が進むであろうことは容易に予想できます。その意味で、今日の日本の美術教育は近代学校制度発足以来類例のない深刻な危機に直面していると言わざるをえません。

　本シンポジウムでは、美術教育を取り巻く厳しい現実を直視する中から、問題の本質は何か、それを打開するためには何が必要なのか、私たちがなすべきことやなし得ることは何かを探りたいと考えています。

＜パネリスト＞
石賀　直之（横浜市立磯子小学校）
高野　直美（川崎市立日吉中学校）
岩崎由紀夫（大阪教育大学）
天形　　健（福島大学）

＜コーディネーター＞
新井　哲夫（群馬大学）

＜日　時＞
平成 15 年(2003)1 月 25 日（土）
13 時 30 分～ 17 時

＜会　場＞
横浜国立大学教育文化ホール地下一階　中集会室
〒240-8501　横浜市保土ケ谷区常盤台79-1
TEL　045-339-3034 ／ 3037

＜会場までの交通機関＞
A)横浜市営地下鉄　横浜駅（又は新横浜駅）から「三ツ沢上町」下車、徒歩 15 分
B)横浜市営バス　横浜駅西口バスターミナル 11 番、22 系統循環外回りバス　約 20 分「岡沢町」下車、徒歩 5 分
C)相鉄バス　横浜駅西口バスターミナル 10 番、交通裁判所行きバス　約15 分 「岡沢町」下車、徒歩 5 分

＜参加費＞
無料。会員でない方の参加も自由です。

＜連絡先＞
新井哲夫　勤務先または自宅
勤務先　〒 371-8510　前橋市荒牧町 4-2　群馬大学教育学部　美術教育講座
TEL&FAX：027-220-7316（研究室直通）
E-mail ： arai@edu.gunma-u.ac.jp
自宅　〒 213-0005　川崎市高津区北見方 1-16-13　TEL&FAX:044-844-1569
E-mail ： ttoarai@mb.infoweb.ne.jp

＊　＊　＊

第２５回美術科教育学会横浜大会

―第二次案内―

大会ホームページ　http://www5e.biglobe.ne.jp/~miyasaka/
＊(2003年1月10日より公開)

寒冷の候，皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。さて，次のとおり美術科教育学会横浜大会の日程・参加申し込み等の詳細が決まりましたのでご案内申し上げます。（最終案内は2月にお送りします。）

■ 会　　期　　平成１５年３月２６日（水）～２８日（金）

■ 会　　場　　横浜国立大学教育文化ホール

■ 大会テーマ　　鑑賞・表現による教育　―メディア芸術と文化芸術振興法の狭間で―

■ 日　程

第1日　3月26日（水）

12:00	……受付開始……
13:00	開会行事
13:20	研究発表 A-1 B-1 C-1 D-1 / A-2 B-2 C-2 D-2 / A-3 B-3 C-3 D-3 / A-4 B-4 C-4 D-4 / A-5 B-5 C-5 D-5 / C-6 D-6
16:30	講演『鑑賞教育と美術学の曖昧な関係』横浜国立大学教授　小野康男先生
18:30	理事会

第2日　3月27日（木）

9:30	研究発表 A-7 B-7 C-7 D-7 / A-8 B-8 C-8 D-8 / A-9 B-9 C-9 D-9 / A-10 B-10 C-10 D-10 / A-11 B-11 C-11 D-11
12:00	昼休み
13:00	研究発表 A-12 B-12 C-12 D-12 / A-13 B-13 C-13 D-13 / A-14 B-14 C-14 D-14 / C-15 D-15
15:00	講演『美術教育における精神性について』ドイツ・オルデンブルク大学教授　ルドルフ・ツア・リッペ先生
17:00	移　動
17:30	懇親会

第3日　3月28日（金）

9:30	研究発表 A-16 B-16 C-16 D-16 / A-17 B-17 C-17 D-17 / A-18 B-18 C-18 D-18 / C-19 D-19
12:30	堀典子先生　科研費研究発表
13:30	総　会

※本年は70名の発表があります。
発表者には，プログラムが完成次第，決定番号をお知らせします。

例：A-1の人は，26日A室13時20分からとなります。

参加申し込みについて

■ 参加費　〔学会参加費〕　5,000円
〔懇親会〕　3,500円／学生（院生を含む）2,000円

◎宿泊は各自でご準備ください。横浜駅周辺が便利です。

■ 参加申し込み最終期限：3月14日（金）

参加申し込み及び参加費・懇親会費の払い込みは，同封の郵便振替払込書でお願いします。必要事項をご記入のうえ，以下の口座（事務局宛）にお振り込みください。

口座番号：00230-5-74034　　口座加入者名　：　美術科教育学会横浜大会事務局
通信欄　：学会参加費／5,000円
懇親会費／3,500円　学割2,000円

※当日受付も行いますが，大会運営上できるだけ事前にお申し込みください。また，3月15日以降は口座に振り込まず，当日，受付にてお支払いください。

■ 問い合わせ

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
横浜国立大学教育人間科学部美術教育講座内　美術科教育学会横浜大会事務局　宮坂元裕
Tel 045-339-3453　E-mail: ynu_bizyutu@hotmail.com
Fax 045-331-0748

第31回InSEA（国際美術教育学会）世界会議（ニューヨーク大会）の報告と今後の展望

福本謹一（兵庫教育大学）

InSEAについて

InSEA（国際美術教育学会）は、1954年に国連ユネスコの外郭団体として設立され、芸術を通した教育が生きる上での価値を高める主体的な学習の手段になることをモットーとしている。ハーバート・リードは、「美術教育の未来」と題する設立記念講演において国際理解に果たす美術の役割の重要さを説いたが、その理念は、現在の多難な国際情勢の中で再認識されるべきであろう。

現在、InSEA会員は、80カ国2000人の会員からなるが経費の増大により、運営状況は必ずしもよくない。しかし、アメリカのユネスコ再加盟により経済支援が期待できるため、より積極的な文化交流を押し進めることが期待されている。

国内では、InSEA Japan（日本美術教育連合）が窓口となっている。ワールド・カウンシル今年は、InSEAワールド・カウンシル（評議会）評議員の改選の年にあたり、アジア地区前評議員の岡崎昭夫筑波大学教授から推薦を受けて、アジア地区代表（他に香港、インドから各一人）に選出された。会長は、シェーナウ氏（オランダ）から北イリノイ大学のバートン教授に代わり、小生を含め22名の新評議員による評議会がスタートした。

第31回ニューヨーク大会

コロンビア大学がホスト役を務め、8/19から8/24まで開催された今回の世界大会（ニューヨーク大会）は、NAEA（全米美術教育学会）及びUSSEA（米国美育協会）が全面的にバックアップし、盛会のうちに終了した。昨年の9.11で予定会場のマリオット・マーキース・ワールドトレードセンターが使用不能となり、タイムズ・スクエアのマリオット・ホテルに会場を移しての開催となったが、テロの影響で心配された参加者数も予想を下回ったものの、前回大会（オーストラリア・ブリスベーン、1999年）とほぼ同じ規模（約700名）となり、会長をはじめ関係者は胸をなで下ろしていた。

伝統・文化の見直し、美についての再検討、学力・知性観の更新、ニューテクノロジーとの関係性の確立、美術表現の探求をテーマに据えた今回の大会は、各国の教育改革と美術教育との関係を考える機会を提供したが、依然として美術教育実践に関わる情報不足を露わにし、相互理解の必要性を痛感させるものでもあった。

日本からの研究発表は十数件を数えたが、質疑応答では、我が国の美術教育への認識不足や文科省の学習指導要領における図画工作科の、drawing & craftという教科名表記から生じる誤解など訳出上の問題点も浮き彫りにさせた。今後、予備知識的な情報案内について共同で製作するなど、研究内容以上に情報発信努力をすることも必要である。

次回開催地及び日本における学会招致活動について

2005年の世界大会次期開催地は現在のところ未定であり、来年ミネアポリスで開催されるInSEA評議会で正式決定がなされるが、オランダ、イギリスが候補地としてあがっている。

昨年の同時多発テロ後の不安定な国際情勢の中で、美術教育に何ができるのかという問いかけに応えるには、一国の教育改革にとどまらず、ひとり一人の問題意識の再構築にかかっていると言える。アジア地区代表としては、今後アジアにおける交流を中心に世界大会への協力をしていきたいと考えている。また、2008年もしくは2011年の世界大会を日本に招致することも念頭におきながら、美術科教育学会をはじめ関係諸機関に働きかける必要があるので、各位のご協力をお願いしたい。

平成14年度
科学研究費補助金採択課題本学会関連一覧

本年度の学会員による科研採択課題（研究代表者、テーマ、配分金額）をお知らせいたします。通信係に寄せられた情報並びに以下の文献を参考にして作成しました。(宇田)

科学研究費研究会編『平成14年度科学研究費補助金採択課題・公募審査要覧(上)、(下)』ぎょうせい、2002年10月

＜研究成果公開促進費　学術図書＞
○立原慶一：題材による美術教育ム「題材論的方法」の体系的研究、230万円、中央公論美術出版
＜基盤研究(Ｂ)＞
継続分
○堀典子：鑑賞と表現の統合を図る（一体化を目指す）鑑賞教育の方法論に関する研究－ドイツの後期中等教育における実践事例の分析をふまえて、320万円
○永守基樹：総合的感性教育の可能性の探求およびイメージ創造を支援する教育システムの開発、430万円
○西野範夫：子どもの学びの過程に対応する基礎・基本学習カリキュラムと教育実践の総合的研究、360万円
＜基盤研究(C)＞
新規分
○水上喜行：造形に於ける時間軸表現の演習モデル研究、250万円
○橋本泰幸：地域社会との連携による「生きる力」を育む美術教育プログラム及びネットワークの開発、290万円
○宇田秀士：美術教育実践における教師の「規範」と題材との関係、140万円
継続分
○磯部洋司；明治・大正期の美術教育思潮に関する研究，80万円
○上山浩；表現活動としてのコンピュータ・グラフィクスの教育機能、70万円
○新関伸也：教育学部美術科における「映像メディア表現」のための系統的カリキュラム構築、60万円
○佐々木宰：学校教育におけるアジア造形文化の鑑賞教材開発に関する研究、130万円
○南部正人；へき地小規模学校のための造形支援プログラムの研究、150万円
○降旗孝：初等・中等教育における一貫カリキュラムの構築－造形美術教科教育の再構築－、50万円
○新井哲夫：図画工作・美術科教育における鑑賞授業モデル及びプログラムの開発に関する研究―造形活動における子どもの発達的特性をふまえた鑑賞教育の方法論的探求、50万円
○宮坂元裕：小学校教科教育における学習課題の成立過程とその評価に関する実践的研究、70万円
○栗田真司：10歳前後に発現する描画表現意欲の低下傾向に関する基礎的研究、90万円
○藤江充：生涯学習社会において学校と美術館の連携を促進するための研究、40万円
＜萌芽研究＞
新規分
○立原慶一：題材論的方法と絵画療法における教育的作用の運関を求めて、200万円
○岡田匡司：音楽と絵画を結びつける新教材の開発と基礎理論の整備、80万円
＜若手研究B＞
新規分
○久保村里正：造形要素の組み合わせによる造形メソッドの確立と高度メディアリテラシー教育への応用、50万円
○直江俊雄：リチャードソンの教育方法に基づいた表現の多様性と批評的探求に関する研究、160万円
○内田裕子：キンジストロフィー症患者さんのための造形教材の開発、160万円
○幸秀樹：鑑賞教育プログラム作成のための児童の視覚イメージ力に関する研究、90万円

継続分
○石崎和宏：美的感性の発達的知見に基づく美術鑑賞教育ソフトウエアの開発、70 万円
＜奨励研究＞
○山田芳明：子どもの「造形知」を育む図画工作科の評価方法、23 万円
○森長俊六：『色彩学習』を支援するためのコンピュータ教材の開発、23 万円

平成13年度の基盤研究における第一次段階審査委員が、任期を終了した委員より公表されています。本学会関連では、大橋功氏（佛教大)、長田謙一氏（千葉大学）が担当されました。（平成 12、13 年度担当）今号も含め学会通信に掲載したこの 5 年間の動向(通信 32, 36, 39, 43 号に掲載。)も次年度秋申請の参考にしていただければと思います。また、小・中・高などの教育現場の先生方が応募できる＜奨励研究＞は、年明け1月締切の予定です。詳しくは、以下の科学研究費補助金ホームページをご覧下さい。
http ://
www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/index.html
なお、今回一覧に漏れていた研究がありましたら、通信担当係　宇田（研究室：Tel・Fax0742-27-9223, udah@nara-edu.ac.jp）までお知らせ下さい。次号に掲載いたします。その他､他の財団や基金の援助を受けた研究、ユニークなプロジェクト・企画を行っている会員からの紹介もお持ちしております。

＊　＊　＊

特集 「教育課程を創る」(６)、（７）

伝え合う美術

鍬田　和見（神戸市教育委員会）

今回の学習指導要領では小学校、中学校及び高等学校を通じて「感性」の育成が重視され、中学校美術の教科目標には「感性を育て」、高等学校の美術(I)･(II)には「感性を高め」、美術(III)には「感性と美意識を磨き」という文言が明記されている。感性を育て、高め、磨くには、美術館などで本物の作品を見る、画集を見たり解説を読むなどしながら、もう一人の自分と対話する内言的活動も大切であろう。その一方で作品を通して多くの人たちと対話する外言的活動も大切である。美的価値観は人それぞれであるが、社会で共通する言語としての美術を成立させるためには共通のそれを確認する必要がある。共通の美的価値観や美的心情、美的感覚や美意識こそが感性であり、それは異質な者同志の交流、対話を通してこそ健やかに培われるものであり、質的な高まりも期待できる。個人的な鑑賞活動だけでは、独断と偏見に充ちた感性を形成する恐れがあるし、一般の人々とともに思いを伝え合う美術の実現は難しいだろう。

学校は集団で学習する場であり制度である。また、そのことを最大限に活用できる学習システムを採用する。現在の美術科の授業において、学習集団による伝え合う活動は十分に保証されているだろうか。鑑賞と表現（制作）は車の両輪であり、一方が回転するだけでは

美術全体の前進はおぼつかない。両者のバランスのとれた関連性の構築こそが、美的判断力・思考力を育み感性を高めるとともに、美術への関心・意欲・態度を高める鍵となるのではないか。今回の学習指導要領改善の基本方針の一つに 鑑賞の充実が謳われてはいるものの、基本的に変化はない。制作中心である。「A表現」と比較すれば「B鑑賞」は内容的にも時数的にも十分とは言い難い。今後は「B鑑賞」の学習内容を「A表現」のそれと同様な質量にするとともに、義務教育９年間の具体的な内容の体系化・系統化を図るよう努力すべきであろう。

では、始まったばかりの今回の教育課程において、鑑賞活動の内容と時数をどのように充実させるのか？それには「総合的な学習の時間」や「選択」を活用する方法が適切ではないだろうか。例えば、総合的な学習においてコミュニケーション能力の育成などをねらいにして子供たち自らが要項を作成し会場交渉をしたり、展覧会のコンセプトや構成を考えたり、ポスターやチラシを作ったり、インターネットで広報したりして展覧会を開催するのである。会場では来場者と作品を媒介としてコミュニケートする。それら一連の活動、つまり表現と鑑賞、個人と集団（社会）、内言と外言のスムーズな循環活動を通してこそ、子どもは真の「表現としての美術」を体感することができるし、美術の価値を知るのではないだろうか。

戦後の物のない時代からバブル期に象徴される物質的な豊かさの時代を経て、感性や個性を尊ぶ文化芸術期に突入してきた。様々な形で美術に親しむ方も増えている。昨年１２月施行の文化芸術振興基本法がその流れを推進するとともに成熟した美術文化の形成に貢献してくれることを強く願っているが、やはり、その土台を形成していくには教育の力が大きい。今こそ伝え合う美術をめざして表現と鑑賞のバランスの取れた総合化に着手すべきときではないだろうか。

「図工版プロジェクトＸ」の体験から

佐々木宰（北海道教育大学釧路校）

この夏、教育委員会からの依頼で、小学生の造形イベントのコーディネートと実際の指導をひきうけることになった。場所は、北海道・洞爺村。有珠山のふもとに広がる洞爺湖をのぞむ小村だ。この村には４つの小学校があるが、いずれも小規模・僻地校だ。その４校の高学年児童が集まり、一泊二日の日程で、洞爺湖畔のフィールドで造形体験をする、というのがイベントの骨子だ。

このイベントは、北海道教育委員会胆振教育局の事業で、行政と学校、地域住民の協力で子どもの教育を創るという目的があるという。私に任された仕事は、４校の先生方、道教委や村教委、地域の方々と一緒に、造形イベントの具体的なプログラムを作って、子どもの指導もするということだ。

忙しい時期だったが、知人を介しての依頼だったので、引き受けてしまった。私の住む釧路市と洞爺村は、車で10時間以上離れている。準備の時間も十分ではない。途中、引き受けたことを少し後悔したが、結果としては非常に勉強になって、よかった。なによりも、現場の先生方や教育委員会、地域の方と、図工の教育内容を新たに創るという体験は、新鮮な体験だった。

最初の打ち合わせ会議で、小学校の先生方と造形活動の内容を考える。先生方からの希望は、野外での造形遊びということくらいだ。二日間の日程で、数十名の児童ができること。簡単なようだが、なかなかアイデアが浮かばないし、話し合いは進まない。話を聞くと、普段の図工指導でも、造形遊びはよくわからな

くて難しい、という。

持参した資料を見てもらって、検討した末、周辺に自生する笹（根曲がり竹）か何かを使って、それをつなげて何かしようということになった。どのようにつなげるか、つなげて何にするかは、これから私が考えて指導案原案を作って送る、ということにした。小学校の先生側の代表は、香川小学校の岡部教頭先生になった。実施日まであと一ヶ月しかない。

打ち合わせの帰り道、所々で車を止めては笹を探して採取する。笹の他にも、イタドリ（虎杖）を採取。帰ってからは、これらをどうつないで、何になるかを検討する毎日だ。三角につないでユニット構造にするか、ランダムにつないでいくか。針金でとめるか、縄でしばるか。できる大きさと、構造、強度はどうなるか。かかる時間はどのくらいか。技術的なレベルはどうか。

試行錯誤の末に、北海道のどこにでも大量に自生するイタドリを使うことにした。北海道のイタドリはオオイタドリで、２メートルは楽にある大物だ。これを麻縄で編むようにつなげ、いろいろな形のスダレ状にして木につるし、スダレ越しの夏の洞爺湖を眺める、というコンセプトを作った。

これを先生方と煮詰めた。離れているのでメールやファックス、電話などでやりとりをした。麻縄を使った編み方は、被服学の教授に教わって、手順をビデオカメラで収録し、岡部先生に送った。先生方に手順を覚えてもらうためだ。岡部先生も、プログラムの変更や策定、試作の状況などを、連絡してくれる。岡部先生からのメールは、送信時刻が早朝や深夜だったりした。このあたりのやりとりは、「図工版プロジェクトX」といった感じだ。

実施日当日、初日は晴天に恵まれ、子どもたちはイタドリを切ったりつなげたりした。用意したイタドリは、前日に私たちが採取したものだ。600本はある。翌日は、完成したスダレを木の枝につるして鑑賞会。集まった全ての子どもが制作と鑑賞に深く関わることができたようだ。結果として、図工版プロジェクトXは、大成功だった。全ての予定を終えたとき、私と岡部先生は、やはりプロジェクトＸみたいに、両手をかたく握り合った。

教えようとする内容に、時間や労力をかけることの意味を、素直に知った。普段の自分の仕事を、反省させられた。教育内容やカリキュラムを語ることと、それらを創ることの距離を縮めたい。ユーザーを考えたものづくりがあるように、教える人と教わる人を考えた教育内容やカリキュラムを職人気質に創る仕事があってもよいだろう。

＊ ＊ ＊

■新入会員の紹介■

松本アリサ（ベルパーク子ども絵画造形教室）
石黒友子（東京学芸大学大学院）
吉川　登（熊本大学教育学部教授）
苅宿俊文（大東文化大学専任講師）
御厨ふみ（横浜国立大学大学院教育学研究科）
小池研二（東京学芸大学附属大泉中学校）
河塚　敦（福岡市立福翔高等学校教諭）
中村幸子（佐賀大学大学院教育学研究科）

■事務局から■

住所変更をなさるご予定、また変更された会員の方にお願いいたします。変更後のご住所・ご連絡先をご面倒ですが事務局（学芸大）と、学会事務センターの双方にお送りくださいますようお願いいたします。年会費の振り込み用紙や通信が届かないという事態を避けるためにも是非ご協力をお願いいたします。

学会事務センター宛先：
〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9 学会センター Ｃ21 （財）日本学会事務センター
山本義道 氏

学会センター URL:
http://www.bcasj.or.jp/index.html
9 学会センター Ｃ２１
（財）日本学会事務センター